

# アイスランドのハムレット—『アムロージのサガ』における信仰— Hamlet in Iceland: On the Religious Faith in *Amlóða Saga*

林 邦彦

HAYASHI Kunihiko

---

**Abstract:** *Gesta Danorum* (c.1208-c.1219) written by the Danish historian Saxo Grammaticus (c.1150-c.1220) contains the narrative of the life of Amlethus that comes down to Shakespeare's *Hamlet*. This paper focuses on the Icelandic prose work *Amlóða saga* transmitted in manuscripts from the latter half of the 17th century onward that treats the same material as Saxo's work, showing how the conflict between Christendom and Islam depicted in *Amlóða saga* leads to reconciliation in the process of the protagonist's revenge against his father's enemies.

---

**Key words:** *Gesta Danorum*, Saxo Grammaticus, *Amlóða saga*, *saga*, *Hamlet*

『デンマーク人の事績』、サクソ・グラマティクス、『アムロージのサガ』、サガ、  
『ハムレット』

---

## 1. はじめに

デンマークの歴史家サクソ・グラマティクス (Saxo Grammaticus、1150年頃～1220年頃) が1208年頃～1219年頃に完成させたとされる『デンマーク人の事績』 (*Gesta Danorum*)<sup>1</sup> と呼ばれる著作は、伝説的な先史時代から12世紀後半にかけてのデンマークの歴史がラテン語で記されたものであるが、この書物の中では、シェイクスピアの『ハムレット』の物語にまで受け継がれるアムレートゥス (Amlethus) のエピソードが語られている<sup>2</sup>。デンマークではその後、

---

<sup>1</sup> 本稿では『デンマーク人の事績』については、以下のテキストを使用：Saxo Grammaticus: *Gesta Danorum = The History of the Danes*. Oxford medieval texts. Ed. by Karsten Friis-Jensen; tr. by Peter Fischer. Oxford: The Clarendon Press, 2015. この版では、Karsten Friis-Jensen の編によるラテン語の原文テキストと Peter Fischer による英訳が対訳の形で掲載されており、この作品については以下の邦訳も刊行されている：サクソ・グラマティクス (著)、谷口幸男 (訳) 『デンマーク人の事績』東海大学出版会、1993年。本稿では『デンマーク人の事績』については、これら英訳と邦訳も参照した。

<sup>2</sup> 『デンマーク人の事績』で語られているアムレートゥスのエピソードは、本稿における使用テキスト (註1に記載) では178頁～220頁 (このうち偶数頁のみ)、対訳の形で掲載の英訳では179頁～221頁 (このうち奇数頁のみ)、邦訳 (註1に記載) では114頁～143頁にあたる。

このエピソードを題材として新たに生み出された作品は、少なくとも現存はしていないが、同じ北欧語圏ではアイスランドにおいて、このアムレートゥスのエピソードを主軸にした独自の物語が伝承されている。

アイスランドの伝承では、ハムレットにあたるアムレートゥスの名はアンバーレス (Ambales) と記される。ただ、詳しくは後述するが、アンバーレスは物語中、その振舞いの故に「アムロージ」 (Amlóði) とのあだ名を付けられる。

この伝承を扱ったアイスランドの作品としては、アイスランド独自の形式の「リームル」 (rímur) と呼ばれる物語詩で、『アンバーレスのリームル』 (Ambales rímur)<sup>3</sup> と呼ばれる作品と、長編の散文作品で、『アムロージのサガ』 (Amlóða saga)<sup>4</sup> と呼ばれる作品が存在する (この長編の散文作品は『アンバーレスのサガ』 (Ambales saga) と呼ばれることもある)。いずれもアイスランド語で著された作品であり、両作品とも大筋では同じ物語を伝えている。

なお、「サガ」 (saga) とは、主として 12 世紀から 14 世紀にかけて、アイスランドで著された散文の物語を伝える書物のことであり、中世アイスランドの有力者個人やその家族の生活を描いたもの、架空の冒険物語を扱ったものなど、数多くの作品が伝承されている (saga という語は、元々は「歴史」や「物語」を意味するアイスランド語の単語である)。

また、散文作品の『アムロージのサガ』と物語詩『アンバーレスのリームル』は、ともに写本によって伝えられており、いずれについても最古の現存写本は 17 世紀後半のものである。

この『アムロージのサガ』と『アンバーレスのリームル』で伝えられる物語の由来に関しては、従来は以下の説が有力であった。それは、リームルの作者はドイツ語の書物をもとにして『アンバーレスのリームル』を著し、次に別の作者がその『アンバーレスのリームル』をもとにして『アムロージのサガ』を著した、というものであるが、近年、この説に対してはいくつもの疑問が提示されている<sup>5</sup>。

<sup>3</sup> 本稿では『アンバーレスのリームル』については、以下のテキストを使用 : Hermann Pálsson, ed. *Ambales rímur eftir Pál Bjarnason*. Rit Rímnafélagins 5, Reykjavík: Rímnafélagið, 1952.

<sup>4</sup> 本稿では『アムロージのサガ』については、以下のテキストを使用 : *Saga af Amlóða edur Ambales* (AM 521 b, 4to). In: Uecker, Heiko, ed. *Der nordische Hamlet. Texte und Untersuchungen zur Germanistik und Skandinavistik* 56. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2005, pp. 57-193.

<sup>5</sup> リームルの作者がドイツ語の書物をもとにして自作を著したとの説は、実際にリームルの作者が作中で、この物語をドイツ語の書物を通じて知った旨を述べていることに基づくもので、このドイツ語の書物としては、『デンマーク人の事績』のラテン語による要約がさらにドイツ語に訳されたもの (15 世紀後半の書物) が有力視されてきた。しかし、リームルの作者が物語の典拠としてドイツ語の書物に言及している発言については近年、その信憑性を疑う声も上がっており、アイスランドの作品で伝わる物語の由来に関する従来の説は揺らいでいる。詳しくは、Uecker, Heiko, ed. *Der nordische Hamlet*. (註 4 前掲書) pp. xvi-xxiii、Felce, Ian.. “In Search of *Amlóða saga*: The Saga of Hamlet the Icelander.” In: J. Quinn and A. Cipolla, eds. *Studies in the Transmission and Reception of Old Norse Literature: The Hyperborean Muse in European Culture*. Acta Scandinavica 6. Turnhout: Brepols, 2016, pp. 101-122 など

しかし、本稿ではこうした物語の伝承経路をめぐる議論については深入りせず、アイスランドの伝承の中でも特に、散文作品『アムロージのサガ』の内容に焦点を当てたい。『アムロージのサガ』の物語の主軸を成すのはアンバーレス（アムロージ）による父の敵討ちの遂行過程であるが、この作品ではキリスト教世界とイスラム教世界の対立も比較的大きな位置を占める。そこで本稿では、特に主人公アンバーレスの人物像について確認した後、アンバーレスによる父の敵討ちの遂行過程と、物語中でキリスト教世界とイスラム教世界の対立が解消に向かう過程との関わりについて考察したい。そのために以下ではまず、『デンマーク人の事績』におけるアムレートゥスをめぐるエピソードのうち、特に『アムロージのサガ』の物語に該当する部分について簡単に紹介し、その上で『アムロージのサガ』の物語の話に入りたい<sup>6</sup>。

## 2. 『デンマーク人の事績』に記されたアムレートゥスをめぐるエピソード

ホルウェンディルス（Horwendillus）とフェンゴ（Fengo）の兄弟は、デンマーク王ロリクス（Roricus）からユトランドの代官に任命される。ホルウェンディルスはロリクスの娘ゲルータ（Gerutha）と結婚し、二人の間に息子アムレートゥス（Amlethus）が生まれる。

しかし、これに嫉妬を覚えたフェンゴはホルウェンディルスを殺し、その妻（アムレートゥスの母）のゲルータと結婚する。アムレートゥスはフェンゴに復讐心を抱く。

アムレートゥスは自分が復讐心を抱いていることを見抜かれないよう、狂人のふりをする。しかし、一見狂ったように見える行為によって、復讐する際に使う道具を作り続ける。

アムレートゥスはその一見狂ったように見える行為の下に何か本心を隠しているのではないかと感じる者が出てくる。アムレートゥスの狂気が装われたものであることを暴くべく、彼の性欲に訴えようと罾が仕掛けられるが、彼の乳兄弟がアムレートゥスに警告を発したことで、その企みは失敗に終わる。

次に、フェンゴは外出することにして、その間、アムレートゥスは母親と二人きりにされ、二人の会話を盗み聞きするべく、一人の者が配置される。しかし、それに気づいたアムレートゥスはその者を殺し、遺体を切り刻み、それを豚に食べてもらうべく下水に流す。

アムレートゥスは母に対し、父を殺した叔父と再婚したことを非難し、自分が叔父に対する復

---

照。

<sup>6</sup> なお、『アムロージのサガ』は今日では、計38点の現存写本で伝わり、それらは17世紀後半から19世紀末頃にかけての作成とされるが、それらのうち、特に重要視されているのは、それぞれ「AM521a 4to」「AM521b 4to」「AM521c 4to」という写本番号で呼ばれている三点である。この三点はいずれも17世紀後半の作成とされ、「AM521a 4to」と「AM521b 4to」は内容が類似し、「AM521a 4to」は「AM521b 4to」を書写したものである可能性も指摘されている（Uecker, Heiko, ed. *Der nordische Hamlet*. (註4前掲書) p. xvii）。「AM521c 4to」は、基本的には同じ物語を伝えているが、先の二点とは細かな相違が散見される。本稿で使用する『アムロージのサガ』のテキスト（註4参照）は「AM521b 4to」写本に基づくものである。

讐を実行するべく狂気を装っている旨を明かす。

アムレートゥスはブリタニアへ二人の家来とともに赴くこととなったが、二人の家来は「アムレートゥスを殺してほしい」との旨が記された手紙を携えていた。二人の家来の就寝中に手紙を見たアムレートゥスは、手紙の内容を、「二人の家来を殺してほしい」と書き換え、その上で、「ブリタニア王におかれては、娘をアムレートゥスに嫁がせてほしい」との内容まで付け加える。

アムレートゥスらはブリタニアに到着し、例の手紙は王に差し出される。さしあたりブリタニア王は彼らを丁重に扱い、宴会が催されるが、アムレートゥスは宴会で出された豪華な飲食物について、その味の悪さを理由にそれらの飲食を避けようとし、王夫妻の高貴な出自に疑問を差し挟む。ブリタニア王はこれらの件について家来や自らの母に尋ね、料理の味や自分ら夫妻の出自をめぐるアムレートゥスの指摘がすべて正しいと認識すると、アムレートゥスの聡明さに感心し、娘（王女）を彼に与え、先の手紙（書き換えられたもの）の内容に基づき、アムレートゥスの二人の家来を絞首刑に処す。

王のもとで一年を過ごしたアムレートゥスは帰国の許可をもらい、ユトランドに帰ると、出発前に母親に頼んでいた通りに彼の葬式が行われているところであった。そこへアムレートゥスが現れたことで周囲は驚く。彼はその場にいた貴族達に酒を勧めて回り、彼らが皆、酔いつぶれて身を横たえてしまったところで館の天井に火を放ち、彼らを皆、焼死させる。

それからアムレートゥスはフェンゴの寝室へ行き、寝台の上に掛かっていた剣でフェンゴを殺害する……<sup>7</sup>

以上が『デンマーク人の事績』におけるアムレートゥスをめぐるエピソードのうち、特に『アムロージのサガ』の物語に該当する部分である。次に、同じアムレートゥスに該当する人物を主人公としたアイスランドの散文作品『アムロージのサガ』の物語について見てゆきたい。

### 3. 『アムロージのサガ』の物語と主人公の人物造形

ドンリーク (Donrik) 王がスペイン、ヒスパニア<sup>8</sup>、キンブリア<sup>9</sup>を統治していた。王は三人の息子ホイクル (Haukur)、バーラント (Baland)、サルマン (Salman) に国を分け与え、長男ホイクルはスペインを、次男のバーラントはヒスパニアを統治する。

キンブリアの王となった三男のサルマンはフランスの伯爵令嬢アンバ (Amba) を娶る。二人

<sup>7</sup> 『デンマーク人の事績』におけるアムレートゥスをめぐるエピソードはこのあとも続くが、ここでは『アムロージのサガ』の物語との関連を考察するにあたり、特に重要と思われる部分に限って内容を記している。使用テキスト（註1に記載）では178頁～200頁（このうち偶数頁のみ）、対訳の形で掲載の英訳では179頁～201頁（このうち奇数頁のみ）、邦訳（註1に記載）では114頁～127頁にあたる。

<sup>8</sup> この作品ではスペイン (Spania) とヒスパニア (Hispania) は別の国という設定である。

<sup>9</sup> デンマークのユラン半島 (ユトランド半島) 北東部の地方名ヒマラン (Himmerland) のラテン語名。

の間にはスィグヴァルド (Siguard) とアンバーレス (Ambales) という二人の息子が生まれる。

この二人の息子達は成長し、スィグヴァルドは心根の厳しい美男子となったが、アンバーレスは醜い風貌で、人々に好まれることは何一つせず、常に台所の灰だまりで横になり、すこぶる評判が悪かった。そのため、人々から「アムロージ」 (Amlóði) <sup>10</sup> と呼ばれるようになる。

スィグヴァルドは10歳に、アンバーレスは8歳になる。

一方、スキティア<sup>11</sup>を治めるイスラム教徒のソルダン (Soldan) 王には三人の息子タメルロイス (Tamerlaus)、マルプリーアント (Malprijant)、ファスティヌス (Fastinus) があり、このうち、タメルロイスは国を継ぎ、マルプリーアントはサルマン王の長兄ホイクルを斃し、スペインを入手する。

ファスティヌスは、マルプリーアントの勧めで、軍勢を連れて、サルマン王の統治するキンブリアを襲撃する。サルマン王はファスティヌスの軍勢に敗れ、一命は取りとめるものの、絞首刑に処される。その際、サルマン王の長男スィグヴァルドは敵討ちを口にしたことで処刑される。しかし、次男アンバーレスは笑って辺りを走り回り、骨やごみをかき集めては、死にゆく兄めがけて投げつける。アンバーレスの命が奪われることはなかった。

サルマン王を斃したイスラム教徒のファスティヌスはキンブリアの王となる。アンバーレスは、母と一緒にそのままキンブリアで暮らし続けることになる。

なお、サルマン王の許にいた特に勇敢な戦士のうち、生き残ったガマリエル (Gamaliel) 伯爵はファスティヌスの側で捕らわれる。しかし、ファスティヌスはガマリエル伯爵を殺すのを惜しみ、ガマリエルにキリスト教信仰を持ち続けることを認め、ガマリエルを自らの相談役に据える。

ファスティヌスは、サルマン王の未亡人となった妃アンバ (アンバーレスの母) を、無理やり妻にしようとする。しかし、寝床で彼女を相手に思いを遂げようすると、局部が疼き出してうまくいかない。それは神の力が引き起こしているものだと解釈したガマリエルの助言で、ファスティヌスはアンバ王妃に寝床で近づくのを断念する。

その後、ファスティヌスは、サルマン王の兄で、ヒスパニアを治めているバーラントが、弟サルマン王の敵討ちに出るのを恐れ、次兄マルプリーアントと二人でバーラント王に宣戦布告をする。

戦闘の末、バーラント王はイスラム勢に捕らえられる。バーラントには妻と三人の息子がいたが、三人の息子達はいずれも殺され、バーラントの妻は悲しみから事切れる。

<sup>10</sup> この Amlóði (amlóði) という語はこの文脈から、明らかに侮蔑的な意味で用いられていると考えられ、アイスランド語・英語辞典 (*An Icelandic-English Dictionary. Second Edition. Initiated by Richard Cleasby. Subsequently Revised, Enlarged and Completed by Gudbrand Vigfussen. Second edition with a Supplement by Sir William Craigie. Oxford: The Clarendon Press, 1957*) では、今日では「愚か者」を表す普通名詞として用いられるとの記載があるが (19 頁)、この語の具体的な語源については不詳である。

<sup>11</sup> 古代のスキタイ人の居住域。現在のウクライナあたりに該当する。

ファスティヌスはバーラント王の妻の妹で、まだ独身であったロータ (Lota) を妃に娶る。

マルプリーアントの娘ティールス (Tijrus) は、見栄えの良いバーラントに恋心を抱き、彼女とバーラントは誠実を誓い合う。

バーラントはキリスト教からイスラム教に改宗し、マルプリーアントの娘を娶らせてもらえ、今まで通り、ヒスパニアの地を治め続けることを認められる。

キンブリアのファスティヌス王のもとでは、アンバーレスはより力強く、大柄になる。しかし、日頃、台所の灰だまりの中で寝そべっていたり、鍋の中の熱いスープや火の粉を下女めがけて投げつけたりといった迷惑行為や、その他諸々の無礼な振舞いばかりを繰り返し、特に仕事をしようとはせず、棘だらけの木製の棒を作り続ける。アンバーレスはファスティヌス王に広間へ呼ばれた折、王を前に奇態を演じ、一触即発の事態に陥る場面もあった。

この頃、アンバーレスは12歳になっていた。

ファスティヌス王はアンバーレスに、羊の見張り番をさせることにする。アンバーレスは他の羊飼達と一緒に山へ向かう。山ではアンバーレスは盗人達のリーダーから武器を奪い、盗人達と羊飼達との戦いを誘発し、双方で死者が出る。しかし、アンバーレスは盗人のリーダーのガーロン (Garon) と戦った末に勝利し、他の盗人メンバーはすべて殺める。ガーロンはアンバーレスに慈悲を請い、友情を誓う。

帰城後、アンバーレスは城市の街路で大柄な盗人ドゥラヴナル (Drafnar) と遭遇する。格闘の末、アンバーレスはドゥラヴナルを抱きかかえて王宮の広間内まで連れて来ると、彼を解き放つ。ドゥラヴナルはファスティヌス王の臣下12人を殺害する。その後、アンバーレスは再度彼を抱きかかえ、遭遇した場所まで連れてくる。アンバーレスは彼に忠誠を誓ったドゥラヴナルに対し、明晩、再度来てくれるよう頼む。

アンバーレスは母アンバの私室へ行き、寝台で眠りに就く。その後、母が私室へやって来て、息子の傷を塗り薬で癒してやる。翌朝、アンバーレスは、「苦境の中にあっても、勇敢に持ちこたえるのです。なぜなら、やがてすべては終わるからです」と母を励ます。

アンバーレスは、取り決め通りに再度やってきたドゥラヴナルと一緒にガーロン<sup>12</sup>のもとを訪れると、自らが置かれた事情を二人に説明し、窃盗行為を戒める。

アンバーレスは王が所有していた豚の世話人の一人となる。ある晩、ファスティヌス王はやや奇妙な夢を見る。伯爵のガマリエルはその夢の内容について、神の怒りだと解釈し、王にキリスト教信仰を持つよう説得する。しかし、王は聞く耳を持たない。

王の臣下のアッドモトゥルス (Addomollus) は、アンバーレスとその母のアンバが何らかの計画を練っている恐れがあるとして、自分がアンバの私室で密かに彼らの動向を探る旨を王に伝える。

---

<sup>12</sup> 先に羊飼達から山上で遭遇した盗人のリーダーだった人物。アンバーレスとの格闘の末に敗北し、アンバーレスに慈悲を乞い、友情を誓った。

アッドモトゥルスはアンバの私室に来て、寝台の下に隠れていると、アンバーレスがやって来る。アンバーレスは寝台の下でガサガサ音がするのが聞こえると、私室内にあった槍で寝台を上から突き刺す。アッドモトゥルスは落命する。

アンバーレスはアッドモトゥルスの亡骸を切り刻み、他の動物の肉と一緒に調理した上で、豚に餌として提供する。

ファスティヌス王が狩りで留守の折、アンバーレスは山岳地帯へ赴く。そこで彼は、小人トステ (Toste) から息子を攫って行く怪物女に遭遇する。アンバーレスは彼女と格闘の末、息子を取り返して小人トステに渡す。怪物女は慈悲を請い、友情と金銭、援助の提供を申し出ると、アンバーレスは彼女を解放する。アンバーレスはトステと怪物女に対し、相互の和解と協調を求める。

アンバーレスは小人トステから、纏えば姿を自在に変えられるマントをもらう。アンバーレスとトステはともにマントで姿を変え、ファスティヌスが留守中の城を訪れ、広間中の椅子を金や宝石で煌びやかに飾り付けるとともに、細やかな技巧で椅子に穴(直径数センチ程度のものと思われる)をくり抜いて立ち去る。

後にファスティヌスが帰城して経緯を聞くと、「来訪したのは人間の姿を取った神マホメットである」との相談役達の見解に同意し、自分達の神への感謝の儀式を執り行う。

ある日のこと、ファスティヌス王はある怖い夢を見る。王はこの夢を、自分への復讐や、自分達の死が近づいていることを表すものと解釈し、アンバーレスによる復讐の阻止を考える。

ガマリエルはアンバーレスを王の次兄であるスペインのマルプリーアント王のもとへ送ることと、その際、手紙で「アンバーレスが相変わらず奇行を続けるなら、慰み物として生かしておいてもらえばよいが、もし、彼が人間らしい振舞いや理性を露わにすれば、すぐに殺してもらるように」と手紙にしたためて頼むことを勧める。

その後、ファスティヌス王が小川へ行った帰り、アンバーレスと小人トステは巨大な光に包まれた姿に変装してファスティヌス王の前に姿を現すと、王に対し、アンバーレスを王の次兄のマルプリーアントではなく、王の長兄であるスキティアのタメルロイス王のもとへ遣うよう勧める。彼らを神々だと思ったファスティヌス王は、アンバーレスを長兄タメルロイスのもとへ遣うことにする。

一方、アンバーレスは、先に登場した怪物女のもとを訪れるべく山岳地帯へ赴くと、人を攫って行く巨人と遭遇する。格闘の末、アンバーレスは巨人を斃す。怪物女と小人トステも駆け付けて来ていた。

巨人には4歳になる娘ハルバ (Harba) がおり、彼女の母は人間であったが、出産時に亡くなっていた。アンバーレスは怪物女にハルバの養育を依頼し、トステからマントをもらって城市へ帰る。

アンバーレスはキンバル (Cimbal) とカルヴェル (Carvel)<sup>13</sup>、および他の同行者達とともに、スキティアのタメルロイス王のもとへと旅に出る。途中、一行はある老夫婦のもとで一晩のもてなしに与るなどして旅を続けていると、前方に大きな湖が現れる。湖の畔で一同は食事を取った後、ひと眠りしたが、途中で起きたアンバーレス (彼は、皆が食事を取っている時から、食事を取らずに眠っていた) は、キンバル達の荷物の中から王の手紙 (先にガマリエルに勧められた内容を記したものを) 見つけて読むと、それを石に括り付けて水に沈め、別に用意してきた手紙と差し替える。

一行がタメルロイス王のもとに到着すると、キンバルが代表で挨拶の言葉を述べてアンバーレスを紹介し、先にガマリエルが手紙に書くよう勧めた内容を伝え、手紙 (しかし、キンバルら他の者達が知らないうちにアンバーレスが差し替えたもので、アンバーレスの武勇や知性を褒めちぎった内容のもの) を差し出す。タメルロイス王はそれを読むと非常に驚く。

タメルロイス王は、渡された手紙を皆の前で朗読し、キンバルらにアンバーレスを連れて来させる。アンバーレスは先程までとは異なる威風堂々たる様をしていた。タメルロイス王はアンバーレスに多大の敬意を払って自分の隣に座らせ、「彼に陰謀を働いた者達」の処遇について尋ねると、アンバーレスは、彼らがキリスト教に帰依し、自分に忠誠を誓うという条件で、命を与える。キンバルとカルヴェル、および他の同行者達はそれに従う。

その後、彼ら来訪者らはタメルロイス王から飲食のもてなしを受けるが、アンバーレスは料理は何も口を付けようとせず、乾杯の際にも杯を取らず、周りから驚かれる。アンバーレスが語るには、ここで出されたパンの材料が作られている畑には、死者の亡骸が埋まっており、乾杯について杯を取らなかった件については、タメルロイス王は売春婦の息子だからだという。

実はその畑はかつて多くの騎士達が斃れた戦場で、実際に畑を掘り返してみると、死者の亡骸が見つかる。さらに、王は母ケミリア (Cemiria) に、自分の出生の秘密について明かすよう強く迫ると、母からは、彼の二人の弟 (マルプリーアントとファスティヌス) はソルダン王の息子であるが、タメルロイスだけは、ソルダンの軍事遠征中にこの地にいたインドのアルタフス (Artax) 公爵とケミリアの間に生まれた子どもだと聞かされる。このように、いずれもアンバーレスの話が真実だと明かされると、タメルロイス王はアンバーレスの知性に感嘆し、彼を自らの相談役に登用する。

一方、王の母ケミリアは、タメルロイスからこの件を無理やり話させられたことを侮辱と捉え、彼の弟達のマルプリーアントとファスティヌスに、タメルロイスがスキティアの正統な相続者ではないことを伝え、彼ら二人はタメルロイスに攻撃を仕掛けることで同意する。

その後、アンバーレスは、軍事遠征の際にタメルロイス王側の軍で活躍する。また、タメルロイス王にはメシヤ (Mesija) という名の娘がいたが、彼女とアンバーレスは相思相愛の仲となり、王の承認を得て結婚する。

---

<sup>13</sup> キンバルとカルヴェルはともに、もともとは、ファスティヌスがキンブリア (当時はアンバーレスの父サルマン王が統治していた) を我が物とするべく攻撃に向かうにあたり、次兄のマルプリーアントから与えられた若い騎士。

ただ、その軍事遠征の際に生け捕りにした敵方のバスティヌス (Bastijnus) という名の王が、その後、タメルロイス王のもとで食事も与えられず、虐待を蒙ることになる。実は、バスティヌスは過去にタメルロイス王の姪を凌辱の上、殺害していたのであった。

あまりの虐待にバスティヌスを不憫に思ったアンバーレスは、バスティヌスのもとへこっそりと食事を届けさせ、慈悲と和睦を求めるようバスティヌスに勧める。しかし、バスティヌスの悪感情は変わらず、彼は後にその従者ともども処刑される。

アンバーレスはタメルロイス王の許で三年間を過ごし、18歳となる。彼はタメルロイス王に、父サルマン王の敵討ちを実行に移したい旨を申し出る。その際、妻のメスィアはタメルロイス王のもとに残してゆくことにする。

アンバーレスは自国キンブリアでクリスマスの祝宴が催されている時期に、キンブリアに着く。ファスティヌス王の兄であるスペイン王マルプリーアントは、この祝宴のために、二人の息子達を連れてキンブリアを訪れていた。王宮の広間へやって来たアンバーレスは再び奇行を始める。外見と行動から、彼をアンバーレスに似ていると思った者は少なくなかったが、それでも大方の者はそうは思わない。

祝宴の最中、アンバーレスは、広間にいたイスラム教徒達の衣服を、彼らが座っていた椅子の穴 (以前、変装したアンバーレスと小人トステがやってきて椅子にくり抜いた穴) に通した上で、それらを自らの方へと引き寄せ、それらの衣服を、彼がかつて作り続けていた棘だらけの木製の棒で突き刺して固定し、彼らが身動きできないようにする。大層酔いが回っていた彼らはアンバーレスの行為に気付かない。彼は、時間が来たら自動的に発火する包みを用意しており、母アンバや王妃ロータ、および他のキリスト教徒らが広間を出るよう巧みに誘導し、ガマリエル伯爵に関しては、アンバーレスが手をつかんで無理やり広間から出させる。そして、広間の中がファスティヌス王を含むイスラム教徒だけとなり、アンバーレスが広間の扉を開めたところで上述の包みが発火する。広間の中は瞬間に炎と煙が充満し、ファスティヌス、マルプリーアントらイスラム教徒は皆、その中で焼死する。

翌日、アンバーレスはガマリエルや母アンバ、王妃ロータらと再会する。王妃ロータには、ファスティヌス王の死に対する悲しみは見られなかった。

ファスティヌス王の死から七日後に、アンバーレスは会合を招集し、その場でアンバーレスは自らの出自と自分が王国の相続者であることを伝え、皆から王として承認される。

その後、アンバーレスは再度スキティアのタメルロイス王のもとを訪れ、同地に二か月滞在した後、先に父サルマン王の敵討ちにあたり、スキティアに残っていた妻メスィアを連れてキンブリアへ戻る。

また、アンバーレスは、以前、ファスティヌス王の命でタメルロイス王のもとへ赴く際に、自分達の一行が世話になった老夫婦を、自らのもとへと呼び寄せ、彼らが亡くなるまで最大限の敬意と愛情をもって遇した。

一方、先にファスティヌス王とともにキンブリアで焼死したマルプリーアント王の娘ティールスは、ヒスパニアのバーラント王の妃となっていた。父の死を知ったティールスは夫のバーラ

ント王に、執拗にアンバーレスに対する復讐を求めたため、バーラント王は軍勢を連れてキンブリアへ赴き、攻撃を仕掛ける。

アンバーレスの側も戦闘態勢を整えるが、その際、かつてアンバーレスの父サルマン王のもとで戦士として戦ったテトゥルス (Tellus) という人物が戦場に現れ、アンバーレスの軍勢に入って戦うことになる。

そして、バーラント側とアンバーレス側との戦闘となる。戦闘の最中、アンバーレスはバーラント王と相見ると、アンバーレスは自分達が血縁関係にあることを理由に、バーラント王に停戦を呼び掛ける。しかし、バーラントは応じず、戦闘はアンバーレス側の勝利に終わる。

アンバーレスはバーラントの命を奪わない条件として、彼がキリスト教信仰に戻ることを命じるが、バーラントはそれを拒む。ガマリエルの助言で、アンバーレスはくじ引きによってバーラントの処遇を決めることにし、くじ引きの結果、バーラントを生き永らえさせることとなる。バーラントはアンバーレスとは多大なる親愛の情のうちに別れ、バーラントは人々の前で、アンバーレスの名望や誉、とりわけその卓越した徳を褒め称え、帰国の途に就く。バーラントは二度とアンバーレスの国の方へは赴かないことを誓う。

バーラントの帰国後、妃は彼を非難したが、バーラントが彼女に、アンバーレスやその戦士達の名望や強運について話すと、妃の心は落ち着き、彼女はアンバーレスの徳に感銘を受ける。

アンバーレスは誰からも愛される王として統治を続け、特にヴァトゥラント<sup>14</sup>の国王ゴドゥフレイル (Godfreir) からの敬意と友情に浴する。ゴドゥフレイルは老齢で寝たきりとなり、アンバーレスに自国の支配を譲ることを申し出ると、アンバーレスは了承する。アンバーレスはキンブリアでは七年間王位にあったが、キンブリアの王位はテトゥルス<sup>15</sup>に譲り、自らはヴァトゥラントの王となる。そして、新たにキンブリアの王となったテトゥルスは、ファスティヌス王の妃であったロータと結婚する。二人は互いに深い愛で結ばれ、多くの子宝に恵まれる。

怪物女は自分の体の衰えを感じ、先が長くないと分かったと、小人のトステを通じてアンバーレス王に伝言を伝えさせる。アンバーレスは怪物女のもとを訪れる。

---

<sup>14</sup> 原語表記は **Valland**。ガリアないしはフランスを指す。ただ、この作品の冒頭近くで、アンバーレスの父サルマン王がフランスの伯爵令嬢アンバを娶った旨が記される際には、フランスを表す固有名詞としては **Frakkland** という語が用いられる (註 4 に記載のテキスト 58 頁)。この **Frakkland** は現代アイスランド語でフランスを表す固有名詞でもある。Joël Supéry によれば、中世期には **Frakkland** という語は、フランスでもロアール川以北のネウストリア (Neustria) を指し、一方の **Valland** はロアール川以南のアキテーヌ (Aquitaine) を指して用いられていたとされる (Supéry, Joël (2017) *Valland and Frakkland, two French kingdoms*. *Akademia*, December 7<sup>th</sup> 2017. <[https://www.academia.edu/35370922/Valland\\_and\\_Frakkland\\_two\\_French\\_kingdoms](https://www.academia.edu/35370922/Valland_and_Frakkland_two_French_kingdoms)> 2024年3月15日参照)。しかし、この『アムロージのサガ』の作者がそのような意識で **Frakkland** と **Valland** という二つの名称を使い分けていたかどうかは、必ずしも判然としない。

<sup>15</sup> かつてアンバーレスの父サルマン王のもとで戦士として戦い、先のバーラント王の軍勢との戦いの際に戦場に現れ、アンバーレスの軍勢に入って戦った人物。

怪物女は高齢ゆえに弱っていたが、豪華な料理で精一杯もてなしてくれる。アンバーレスは怪物女に、彼女の誠意とハルバを育ててくれたことに感謝し、ハルバを引き取る。

怪物女はハルバに自分の全財産を譲り、彼女に限りない幸運を願う。アンバーレスと怪物女は大きな愛のうちに別れる。その後、ハルバは結婚し、夫婦は多大な幸運と名望に包まれ、有徳の生涯を送り、多くの子宝に恵まれたと言われている。

一方、アンバーレスには三人の息子と一人の娘が生まれ、長男はサルマン、他の二人の息子はゴドゥフレイル、ガマリエルと名付けられる。

アンバーレスは生涯にわたり、名誉のうちにヴァトゥラント王国を統治し、高齢になって穏やかに逝去する。彼は誰からも褒め称えられる。彼の息子の中で最も秀でていたゴドゥフレイルは父の王国を継承する。一方、長男のサルマンはキンブリアの国を継ぎ、テトゥルス王の娘と結婚する。

以上が『アムロージのサガ』の梗概である。このように見てみると、『アムロージのサガ』という作品は、主人公による父の敵討ちの実行という大筋といくつかのエピソードは、『デンマーク人の事績』のアムレートゥスのエピソードと変わらない。そして、そこに数多くの独自のモチーフや登場人物達が加わり、主人公のアンバーレスが周囲で巻き起こる様々な問題を解決しつつ、父の敵討ちの完遂に至るまでの過程を主軸とした独自の物語へと編み上げられているのがわかる。

この『アムロージのサガ』の物語について、『デンマーク人の事績』と比べた際に見られる相違点については、Otto L.Jiriczek が一通り指摘している<sup>16</sup>。他の研究者による指摘も含め、特に基本的な点は以下のようにまとめられよう。

①『アムロージのサガ』では主人公の父の殺害者は叔父ではなく、純然たる外敵の他者であり、未亡人となった主人公の母が夫の殺害者と結ばれることもない。したがって、主人公の母が「夫の殺害者である夫の実弟と再婚した」という点、および主人公がそれを「不貞」と非難するという要素もない。

②『アムロージのサガ』では『デンマーク人の事績』には存在しない数多くのエピソードや登場人物が盛り込まれ、『デンマーク人の事績』に比べると、主人公アンバーレスの奇行の程度がより甚だしく、その様は詳細に描かれる。

③Felce (2016) の指摘にもあるように、主人公のアンバーレスは父の死に直面する前から奇行を繰り返している。

---

<sup>16</sup> Jiriczek, Otto L.. “Die Amlethsage auf Island.” In: *Beiträge zur Volkskunde. Festschrift für Karl Weinhold*. Breslau: W. Koebner, 1896, pp. 59-108.

ただ、③について付け加えれば、アンバーレスは羊飼いや達とともに山へ赴いたあたりから、彼が正気と狂気を巧妙に使い分けている様が窺えるようになると言えよう。

また、この作品では随所でアンバーレスが高潔な人柄である様が描かれている点も、Jiriczek (1896) によって指摘されている。Jiriczek は具体的な箇所については記していないが、以下のような箇所が、具体的な箇所として挙げられよう：

①アンバーレスは母の私室で母に「苦境の中にあっても、勇敢に持ちこたえるのです。なぜなら、やがてすべては終わるからです<sup>17</sup>」と慰めの言葉をかけ、勇気付ける。

②かつては盗人で、ともにアンバーレスに降参したガーロンとドゥラヴナルの二人に対し、アンバーレスは「もし、私がこの王国を我が物にし、王を打ち負かすことができた暁には、我々をめぐる状況も好転するかも知れませんが、あなた方には名誉のうちに財を得ていただけましょうが、それは決して略奪や窃盗によってではありません。なぜなら、そうした行為は最後には悪い結果と指弾を招くからです<sup>18</sup>」と窃盗行為を戒める。

③アンバーレスが山岳地帯へ赴いた際、小人トステが怪物女に子どもを奪われたのを受け、アンバーレスはトステのために子どもを取り返してやる。その後、怪物女と格闘になったアンバーレスは彼女を殺そうとするが、彼女が友情と金銭、援助の提供を申し出ると、怪物女を解放する。そして、怪物女とトステに相互の和睦と互いの協調を求める。その上で、「他人に何ら悪事を働くことのないよう、ご注意ください。悪くみは悪い結果しか招きませんので<sup>19</sup>」と悪事を戒める。

④アンバーレスは怪物女のもとを訪れるべく山岳地帯に赴いた際、巨人が人を攫って行くのを目撃すると、巨人にその者の解放を求めるが、応じないのを受け、巨人を格闘の末に斃す。すると、遺児となった巨人の娘ハルバの養育を怪物女に依頼する。後に怪物女から、恐らくは「老齢の故にハルバをこれ以上養育するのが難しい」との旨と思われる伝言を受け取ると、アンバーレスはハルバを引き取る。

<sup>17</sup> 原文は以下の通り：Ber þu þig vel j þrautum þinum, þui alltt tekur enda vmm sijder (108 頁) 本稿における『アムロージのサガ』の原文からの引用は、すべて註 4 に記載のテキストによる。頁数はこのテキストの該当箇所の頁数（以下同様）。

<sup>18</sup> 原文は以下の通り：faa eg rijke þessu nad og konginn vnnid, kann vera ad þa batne hæger vckar, aflid fiar med sæmdum enn ei med rane, nie þiofnade, þui slijkt færlann enda og vestann þrijz ad lickttumm (109 頁)

<sup>19</sup> 原文は以下の通り：varast alla vonsku múnnum ad sijna þui þlitt rad færlann enda, (120 頁)

⑤アンバーレスは、タメルロイス王のもとへ向かう際に彼に同行したキンバルとカルヴェルの命を奪いはせず、キリスト教への帰依と自らへの忠誠を誓うことを条件に、彼らを生き永らえさせる。

⑥タメルロイス王が軍事遠征の際に生け捕りにした敵方のバスティヌス王は、タメルロイス王の姪を凌辱の上、殺害していたという過去があり、タメルロイス王のもとでは食事と与えられず、虐待を蒙っていた。しかし、バスティヌスを不憫に思ったアンバーレスは、彼のもとへこっそりと食事を届けさせ、慈悲と和睦を求めよう、バスティヌスに勧める。

⑦アンバーレスは、タメルロイス王のもとへ赴く際に一行が世話になった老夫婦を、後に自らのもとへ呼び寄せ、最大限の敬意と愛情をもって遇する。

⑧伯父にあたるバーラント王から軍事攻撃を受けた折の戦闘時、アンバーレスは、自分達が血縁関係にあることを理由に、伯父バーラントに停戦を呼び掛ける。

夫と国を奪われ、苦境にある自らの母に慰めの言葉を掛けたり、怪物女から小人トステの子どもを奪い返したり、巨人と戦い、攫われた人を助けようとするなど、アンバーレスが、苦境に置かれた善良な弱者に救いの手を差し延べる様が何度も描かれる。一方、アンバーレスは物語中、様々な敵と戦うが、その敵が自分に降参し、忠誠を誓うと命を与え、その上で、例えばガーロンやドゥラヴナルに対しては窃盗行為を戒め、小人トステと怪物女には相互の和睦と協調を求め、タメルロイス王のもとで虐待されるバスティヌス王に憐憫の情を感じて食事を届けさせ、和睦を促すなど、決して無用な争いは好まず、反目し合っていた者達の間には極力和解をもたらそうとし、時に相手に人としての正しい道を説いたりもしているのであり、この作品ではアンバーレスは全編を通じて、他者への思い遣りや慈愛、友愛の精神に溢れた人物として描かれていることがわかる。

一方、作中、アンバーレスとは信頼関係で結ばれ、彼の義父ともなるタメルロイス王は、『デンマーク人の事績』において、アムレートゥスが送られる先のブリタニア王に対応する人物である。しかし、『デンマーク人の事績』においては、アムレートゥスの叔父フェンゴが生前、ブリタニア王との間で、互いに相手のための敵討ちを約束していたため、ブリタニア王は、フェンゴがアムレートゥスに殺されたのを知ると、娘婿となっていたアムレートゥスへの復讐へと動き、紆余曲折の末、落命する<sup>20</sup>のに対し、『アムロージのサガ』では、タメルロイス王は、アンバー

<sup>20</sup> この内容は、先に本稿の本文で、『デンマーク人の事績』におけるアムレートゥスをめぐるエピソードのうち、特に『アムロージのサガ』の物語に該当する部分として記した内容の後に続く部分で語られる。フェンゴが生前、ブリタニア王との間で互いに相手のための敵討ちを約束していたことも、作中では、ブリタニア王がフェンゴの殺害とその下手人を知った折に初めて地の文（註1に記載の使用テキスト210頁、英訳211頁、邦訳136頁）で明かされる。

レスの復讐の対象者とそのような約束は交わしておらず、タメルロイスとアンバーレスの関係は最後まで良好なまま保たれる。

また、アンバーレスの母アンバが夫の殺害者と結ばれる形にならないことは、.Jiriczek によっても指摘されていることで、その後、作中でアンバが再婚することはないが、不本意ながらファスティヌス王に娶せられたロータ王妃と、幼くして両親をともに失った巨人の娘ハルバは、いずれも後に幸せな結婚と子宝に恵まれる。罪なくして不幸な境遇に置かれた女性に最後には幸せをもたらそうという作者の心遣いが感じられる（そもそも巨人の娘ハルバは巨人の死後、怪物女によって手厚く養育されている）。

一方、管見の限り、先行研究では必ずしも本格的な言及は見られないものの、この殺された父の敵討ちを主軸として展開する『アムロージのサガ』の物語中、比較的大きな位置を占めているのはキリスト教世界とイスラム教世界の対立とその解消に至る過程である。

#### 4. 父の敵討ちと宗教間対立

この『アムロージのサガ』の物語の主軸を成すのは、父を殺された主人公アンバーレスによる敵討ちの過程であるが、この主人公による父の敵討ちの遂行過程にキリスト教世界とイスラム教世界の対立という要素が関わってくる。というのも、主人公の側は代々（少なくとも作中に記述のある限りでは祖父のドンリーク王の代から）キリスト教の家系であるが、この家系の一族がイスラム教徒勢の攻撃に見舞われることになるからである。

主人公の一族を襲うイスラム教徒勢の中心となるのは、マルプリーアントとファスティヌスの兄弟である（この二人には兄タメルロイスもおり、タメルロイスは彼らの父の国スキティアを継承していたが、タメルロイスは主人公の家系に対する攻撃に直接は関与せず、後に、弟達とは異父兄弟であることが判明する）。

主人公アンバーレスの父はキンブリアの王サルマンであるが、まず、そのサルマンの長兄で、その父ドンリーク王からスペインを継いでいたホイクルが、イスラム教徒のマルプリーアントに殺害され、マルプリーアントに国を奪われる。それに次いで、主人公アンバーレスの父サルマン王の国キンブリアが、マルプリーアントの弟ファスティヌスの軍勢に襲われる。捕らわれの身となったサルマン王とその長男スィグヴァルドは殺害され、キンブリアの国はファスティヌスのものとなる。

マルプリーアントとファスティヌスはともに、奪った国をイスラム教化する。ただし、サルマン王の臣下で卓越した騎士であったガマリエルは、ファスティヌス側に捕らわれの身になるも、ファスティヌスは彼を殺すのを惜しみ、ガマリエルはファスティヌスのもとでも相談役に登用され、キリスト教信仰の保持も認められる。

一方、マルプリーアントとファスティヌス兄弟は、自分達が亡き者にしたホイクルとサルマンの兄弟であるバーラントからの復讐を恐れ、バーラントが治めていたヒスパニアを攻撃する。彼らはバーラントを生け捕りにするも、マルプリーアントの娘とバーラントが相思相愛の仲とな

る。バーラントはイスラム教に改宗し、マルプリーアントの娘を娶ることと、継続してヒスパニアを統治することを許される。こうして、バーラントは主人公アンバーレスの敵勢に取り込まれた形となる。

この状態で本格的に主人公アンバーレスの物語が始まり、キリスト教徒であるアンバーレスは、父の命と国を奪ったイスラム勢（具体的にはファスティヌスとその臣下達）に対し、父の敵討ちと自国キンブリアの奪還を目指し、着々と計画を進めてゆく。ここにおいて、「殺人の被害者遺族 対 加害者」という図式に重なる形で、「キリスト教世界 対 イスラム教世界」という対立も発生する形となる。

実際、『アムロージのサガ』の物語は基本的に、アンバーレスが奇態を演じつつも様々な人と関わり、着々と父の敵討ちの遂行に向けて準備を進めてゆく過程が主軸の物語であるが、作中、折に触れてキリスト教信仰とイスラム教信仰の間の軋轢が顔を覗かせる。

例えば作中、ファスティヌスは二度にわたって悪夢を見る。彼が一度目に悪夢を見た折に、相談役のガマリエルはファスティヌスに対し、キリスト教を信仰し、悔い改め、罪の償いをすべきだと進言する。しかし、ファスティヌスは応じず、むしろガマリエルに非難の言葉を投げかける。

一方、ファスティヌスは、変装したアンバーレスとトステが行った広間内の椅子の装飾工事について、その仕事を自分達の神マホメットによるものだと思うと、自分達のイスラム教の神への感謝の儀式を行うなど、ファスティヌスが敬虔なイスラム教徒である様が窺える。

そのような中、アンバーレスの存在に危険を感じたファスティヌスは、彼を次兄マルプリーアントのもとへ送ることを考える。すると、いかにもイスラム教の神のごとく変装したアンバーレスはファスティヌスの前に現れ、アンバーレスを彼の長兄タメルロイスのもとへ送るよう勧め、この助言は聞き入れられ、アンバーレスはスキティアのタメルロイス王のもとへ赴くことになる。

タメルロイス王はアンバーレスの敵方となるイスラム教徒三兄弟の長男として登場するも、最初に登場した時点から、第二人（マルプリーアントとファスティヌス）とは風貌、性格とも異質である旨が記される。そして、彼はキリスト教徒の女性と結婚後も、彼女にキリスト教信仰の保持を認めるなど、他者への思い遣りを窺わせる。

タメルロイスは、自らのもとを訪れたアンバーレスから、自国の畑に埋まった戦死者の亡骸の存在や自らの出生の秘密などを指摘され、当初は憤りを覚えるも、それが真実だとわかるとアンバーレスの知性に感嘆し、彼を相談役に登用する。一方のアンバーレスもタメルロイスの身の安全と長命を宣言し、二人は確固たる信頼関係で結ばれる。さらには、後にアンバーレスはタメルロイスの娘と結婚し、タメルロイスはアンバーレスの義父となる。

その後、アンバーレスは父の敵討ちを実行に移すべく故国キンブリアに向かい、マルプリーアント、ファスティヌス兄弟をその臣下ともども焼死させ、父の敵討ちを完遂する。

この間、タメルロイスは自らの妻やアンバーレスに対し、決してイスラム教信仰を強要することではなく、一方のアンバーレスは、タメルロイスにキリスト教信仰の何たるかを教示し、キリス

ト教信仰を勧めることはあっても<sup>21</sup>、決してそれを無理強いすることはない。アンバーレスとタメルロイスは、ともに自分の信仰を大事に保ちながらも、互いに相手がそれぞれの信仰を持つことを認め合っている様が窺える。

しかし、この作品はアンバーレスが父の敵討ちを終えたところで終わりではない。

アンバーレスの伯父にあたるバーラントは、イスラム勢のマルプリーアントの娘との結婚にあたってイスラム教に改宗し、継続してのヒスパニアの統治を認められ、イスラム勢に取り込まれた形となっていた。

その後、アンバーレスによる父の敵討ちの完遂に至るまでの歩みを主軸とした、この物語の主要部分が語られる間は、バーラントは作品の表舞台からは姿を消しており、アンバーレスが父の敵討ちを果たしたところで再び登場する。

アンバーレスが父の敵討ちとして、ファスティヌスとマルプリーアントを焼死させると、伯父のバーラントは、マルプリーアントの娘である自らの妃から、父マルプリーアントの敵討ちをけしかけられる。それを受けてバーラントは軍勢を引き連れてアンバーレスの国に攻撃を仕掛けるも、敗北を喫する。

アンバーレスはバーラントの命を奪わない条件として、彼がキリスト教信仰に戻ることを命じるも、バーラントはそれを拒む。ガマリエルの助言で、アンバーレスはくじ引きによってバーラントの処遇を決めることにし、くじ引きの結果、バーラントを生き永らえさせることとなる。バーラントはアンバーレスとは多大なる親愛の情のうちに別れ、バーラントは人々の前で、アンバーレスの名望や誉、とりわけその卓越した徳を褒め称え、帰国の途に就く。バーラントは二度とアンバーレスの国の方へは赴かないことを誓う。

バーラントの帰国後、妃は彼を非難したが、バーラントが彼女に、アンバーレスやその戦士達の名望や強運について話すと、妃の心は落ち着き、彼女はアンバーレスの徳に感銘を受ける。ここに、バーラント側とアンバーレス側は完全な和睦に至ったと言える。

この作品では主人公側がキリスト教徒で、敵方がイスラム教徒であることもあり、基本的には全編を通じてキリスト教信仰がイスラム教信仰の上位に置かれている。アンバーレスは、タメルロイスにはそもそもキリスト教信仰を強要しようとした様は見られないが、自らの仇敵だったファスティヌスとマルプリーアントを斃した後、自らに攻撃を仕掛けてきた伯父のバーラントに対しても、一度はキリスト教信仰への回帰を命じながらも、最終的にはイスラム教信仰の保持を認めている。主人公側が信仰するキリスト教の世界が上位となりながらも、主人公側はイスラ

<sup>21</sup> アンバーレスは父の敵討ちを果たし終え、自らが王に選ばれた後、敵討ちに際してスキティアに残してきた妻メシアを迎えに行くべく、スキティアのタメルロイス王のもとを訪れ、二か月間滞在する。そして、アンバーレスがタメルロイス王に、再度本国のキンブリアへ戻りたい旨を申し出た折、タメルロイス王から、彼の妃がたびたび祈りを捧げている神（キリスト教の神）について尋ねられると、アンバーレスは彼に真実をすべて伝え、キリスト教信仰を持つよう勧める。タメルロイス王は、「私はそのような信仰を決して呪ったり迫害したりするつもりはない。しかし、私は私の神々を崇拝する」(sijst mun eg formæla slijkri tru eda hana ofsækia þo mun eg mijna gudi tilbidia) と答える (171 頁～181 頁)。

ム教世界の存在も認め、その世界と平和的に共存する形となって物語が終わっている。

このように、『アムロージのサガ』ではアンバーレスが父の敵討ちを遂行する過程に、このような対立する二つの宗教世界の平和的な共存に至る過程が重ねて描かれている。イスラム教勢は、元々はアンバーレスにとっては自らの父を殺めた敵勢であったが、アンバーレスが父の敵討ちを完遂できたことに加え、アンバーレスが父王の敵討ちの計画を進める過程で、イスラム勢の三兄弟の一人ではありながらも、アンバーレスの仇敵達とは父親を異にし、性格も異なるタメルロイスと信頼関係を築いたことで、父王の殺害者達に復讐した後の、キリスト教世界とイスラム教世界の共存の道が開けたと言え、アンバーレスは、イスラム勢を敵と捉えていた過去の自分を乗り越える形になったと言えよう。

## 5. 結語

本稿では『アムロージのサガ』について、主人公アンバーレスの人物像について確認した後、アンバーレスによる父の敵討ちの遂行過程と、物語中でキリスト教世界とイスラム教世界の対立が解消に向かう過程との関わりについて見てきたが、言うまでもなく、『アムロージのサガ』の物語はシェイクスピアの『ハムレット』と素材を共有するものである。『アムロージのサガ』は『ハムレット』には見られない多数の独自の物語要素を含む一方で、父の敵討ちの実行という大筋といくつかのエピソードは『ハムレット』と共有しているが、それら両作品に共通する要素についても、それぞれの作品における扱われ方には、独自の特徴が見受けられる。

まず、『ハムレット』では、主人公ハムレットの父を殺したのは叔父であり、それからほどなく、この叔父が主人公の母を娶ったことから、ハムレットは母を不貞と非難する。これは『デンマーク人の事績』と変わらないが、『アムロージのサガ』では、主人公アンバーレスの父の殺害者は純然たる外敵であり、しかも、この外敵が主人公の父を殺害した後、その妻（主人公の母）を我が物にしようとするも、寝床では局部が疼いてうまくいかず、彼女を娶るのを断念する。その結果、主人公の母は夫王の亡き後、その殺害者（そもそも自らと姻戚関係にはない）の妻となることはなく、したがって主人公アンバーレスが母を「不貞」を罵ることもない。『ハムレット』では『デンマーク人の事績』と同様、主人公が母に面と向かい、その不貞について激しく咎め立てる場面があるが、『アムロージのサガ』において、これに対応すると思われる場面では、アンバーレスは、「苦境の中にあっても、勇敢に持ちこたえるのです。なぜなら、やがてすべては終わるからです」と、やさしく母を励ます。

また、『アムロージのサガ』においては、ファスティヌス王の臣下のアッドモトゥルスは、アンバーレスと母アンバの会話を盗み聞こうと、アンバの私室の寝台の下に隠れていたところ、同室内に入ってきたアンバーレスに気付かれ、殺害される。これは、『ハムレット』におけるポーロニアスの殺害に対応するものと言えるが、ポーロニアスはあくまでハムレットの胸の内だけを探ろうとして盗み聞きを試みるのであり、母ガートルードに対しては特に不審の念を抱いている様は窺えないのに対し、『アムロージのサガ』では、アッドモトゥルスはアンバーレスとそ

の母の二人が、何らかの計画を練っている恐れがあるとして、彼女の私室で密かに彼らの動向を探ろうとするのであり、アンバーレスの母も、主人公の敵方から怪しまれている。

さらに、『アムロージのサガ』の登場人物で、ポローニアスに対応する役割が見られるのは、このアッドモトゥルスだけではない。『アムロージのサガ』では、もともとサルマン王のもとにいたガマリエル伯爵について、ファスティヌス王は彼を殺すのを惜しみ、自らの相談役に据えるが、その後、ガマリエルはファスティヌスに対し、条件付きでのアンバーレス殺害を依頼する手紙を彼自身に持たせて他国に遣ることを勧め、ファスティヌスをアンバーレスから護ろうとするなど、ファスティヌス王の相談役となつてからのガマリエルにも、ポローニアスに対応する役割が見受けられると言えよう（ただし、アンバーレスは広間でファスティヌス王らイスラム勢に復讐する際、ガマリエルを巻き込まないよう、彼を無理矢理広間から出させる）。

また、ハムレットはローゼンクランツとギルデンスターンを伴い、船でイングランドへ向かう途上、自らの処刑を依頼する王の親書を見つけると、ローゼンクランツとギルデンスターンの処刑を依頼する形に書き換える。その後、船が海賊に襲われるとハムレットは海賊の捕虜となり、デンマークへと帰還する。ハムレットが今回の旅でイングランドの土を踏むことはなく、ローゼンクランツとギルデンスターンの二人はイングランドに到着後、ハムレットが書き換えた親書の内容に基づき、処刑される。一方、『アムロージのサガ』では、アンバーレスは、ローゼンクランツとギルデンスターンにあたるキンバルとカルヴェルらを伴い、スキティアのタメルロイス王のもとへ向かう。その途上、条件付きでの彼の殺害を依頼するファスティヌス王の書状を見つけると、それを石に括り付けて水に沈め、別に用意してきた手紙と差し替える。その手紙はアンバーレスの武勇や知性を褒めちぎった内容のものではあるが、その中では決してキンバルやカルヴェルらの殺害は依頼していない。スキティアに到着後、アンバーレスはタメルロイス王からキンバルやカルヴェルらの処遇について尋ねられると、キリスト教への改宗と自らに対する忠誠を誓うことを条件に、彼らを生き永らえさせる意向を明かす。キンバルやカルヴェル、および他の同行者達はそれに従う。

そして、ハムレットが父の亡霊は本物なのか、それとも悪魔なのかと判断に迷う点については、ハムレットが、死者の亡霊の存在を認めるカトリックと、それを認めないプロテスタントの間で揺れているとの解釈もできるとされる<sup>22</sup>。一方、『アムロージのサガ』においては、既述のように、アンバーレスの家系は祖父のドンリーク王の代からキリスト教の家系であるが、この作品の冒頭でドンリーク王が紹介される際、「彼はキリスト教を信仰し、教皇の監督に服しており、それは彼の統治するすべての国々が同様であった<sup>23</sup>」と記されることから、ドンリーク王や彼が

<sup>22</sup> 平 辰彦『Shakespeare 劇における幽霊—その演劇性の比較研究—』自然社、1997年、36頁～39頁、河合祥一郎『シェイクスピア ハムレット～悩みを乗り越えて悟りへ』（NHK「100分 de 名著」ブックス）NHK出版、2022年、32頁～34頁などを参照。

<sup>23</sup> 原文では以下の通り：hann hafdle] chri[st]nna manna tru og var under pafanz reglumm og so uoru öll hanz lönd (57頁) なお、[ ]内は、写本上では欠落していた文字について、本稿での使用テキストの編者が補足したもの (xxxii 頁)。

統治する各国の国民はみなカトリック信者だったと考えられる。その後、ドンリークの統治国は息子達に継承されるが、イスラム勢による襲撃後も、キリスト教（カトリック）信仰を保持したアンバーレスらがプロテスタントに改宗したことを窺わせる記述や、プロテスタントとの間で揺れる様を表すような記述は見られず、アンバーレスのカトリック信仰は作中一貫して揺らぐことはない。その上で、アンバーレスとタメルロイス王は互いの信仰を尊重し合い、元々はキリスト教徒（カトリック信者）でありながらも、イスラム勢に取り込まれたバーラントに対しては、アンバーレスが最終的にはイスラム教信仰の保持を認めることから、この物語の世界において、キリスト教世界とイスラム教世界の平和的共存が実現する形となる。

『アムロージのサガ』は、父の敵討ちの実行という大筋やいくつかのエピソードは、『デンマーク人の事績』や『ハムレット』と共有しつつ、それらにいかばかりかの特徴的な改変が施され、物語には数多くの独自のモチーフや登場人物達が加わっている。そのような形で、根底においては争いごとを好まない友愛主義者の主人公が、周囲で巻き起こる様々な問題を、その人徳によって解決しながら父の敵討ちを完遂するとともに、元々は彼の敵側の人間でありながらも、彼と同じように他者への慈悲深さと包容力を備えた他国の王と信頼関係を結び、ともに相手の信仰を尊重し合うことで、キリスト教世界とイスラム教世界の争いをも収め、イスラム勢を敵と捉えていた過去の自分を乗り越えるに至る過程を描いた作品だと言えるであろう。

付記 本稿は、国際融合文化学会 2022 年春例会（2021 年度 3 月例会、於 熱海駅前第一ビル 5 階 会議室 A、2022 年 3 月 27 日）における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。貴重なご意見をくださった方々に心より御礼申し上げたい。

参考文献（註で挙げたものは除く）

- Bjarni Einarsson. *Munnmælasögur 17. Aldar*. Íslenzk Rit Síðari Alda 6, Reykjavík: Leiftur, 1955.
- Collinson, Lisa. “A New Etymology for Hamlet? The Names Amlethus, Amloóði and Admlithi.” *Review of English Studies* 62 (2011), pp. 675-694.
- Glauser, Jürg. *Isländische Märchensagas. Studien zur Prosaliteratur im spätmittelalterlichen Island*. Basel/Frankfurt am Main: Helbing & Lichtenhahn, 1983.
- Gollancz, Israel, ed. *Hamlet in Iceland Being the Icelandic Romantic Ambales Saga, with Extracts from the Five Ambales Rimur and Other Illustrative Texts, for the Most Part Now First Printed, and an Introductory Essay*. London: David Nutt, 1898.
- Hansen, William F.. *Saxo Grammaticus and the Life of Hamlet*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1983.
- 小泉 保『カレワラ神話と日本神話』（NHK ブックス 855）日本放送出版協会 1999 年。
- Krause, Wolfgang. “Der Hamletstrophe Snæbjörns.” In: Gellinek, Christian, ed. *Festschrift für Konstantin Reichardt*. Bern: Francke, 1969, pp. 87-97.

- Lavender, Philip. “Timur, ‘The Wrath of God’: An Unknown Source of *Oddverjaannáll* and the Vindication of a Tyrant in *Ambáles saga* and *Ambáles rímur*.” *Gripla* 31 (2020), pp. 125-158.
- 岡 三郎『人類史から読む「ハムレット物語」サクソ・シェイクスピア・大岡昇平』国文社 2020年。
- Olrik, Axel. “Amledsagnet på Island.” *Arkiv för nordisk filologi* 15 (1899), pp. 360-376.
- Power, Rosemary. “Saxo in Iceland.” *Gripla* 6 (1984), pp. 241-258.
- Schlauch, Margaret. *Romance in Iceland*. New York: Princeton University Press, 1934.
- Shakespeare, William. *Hamlet: The Texts of 1603 and 1623*. The Arden Shakespeare Third Series. Thompson, Ann and Taylor, Neil eds. London: Bloomsbury Publishing, 2007.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Revised edition. The Arden Shakespeare Third Series. Thompson, Ann and Taylor, Neil eds. London: Bloomsbury Publishing, 2016.
- シェイクスピア (著)、河合祥一郎 (訳)『新訳 ハムレット』(角川文庫 Shakespeare Collection) 角川書店 (KADOKAWA) 2003年。
- Simek, Rudolf/Hermann Pálsson. *Lexikon der altnordischen Literatur. Die mittelalterliche Literatur Norwegens und Islands*. 2., wesentlich vermehrte und überarbeitete Auflage. Kröners Taschenausgabe 490. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 2007.
- 谷口幸男『エッダとサガ 北欧古典への案内』(新潮選書) 新潮社 1976年(改版 2017年)。
- 谷口幸男「北欧のハムレット伝説」『広島大学文学部紀要』第39巻 216～236頁 1979年12月(再録: 谷口幸男『ゲルマンの民俗』溪水社 1987年 83～106頁)。
- 谷口幸男「アイスランドのハムレット」大阪学院大学『国際学論集』第1巻 第2号 19～36頁 1991年3月。
- Van Nahl, Astrid. *Originale Riddarasögur als Teil der altnordischen Literatur. Texte und Untersuchungen zur Germanistik und Skandinavistik* 3. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1981.
- Weber, Gerd Wolfgang. “Die Literaturen des Nordens.” In: Erzgräber, Willi, ed. *Europäisches Spätmittelalter*, Neues Handbuch der Literaturwissenschaft 8. Wiesbaden: Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion, 1978, pp. 478-518.